

東日本大震災にともなって生じた福島
県内における特別支援教育のニーズ
調査と子ども・教師・保護者支援

研究代表者 松崎博文(人間発達文化学類)

1 調査研究の目的

- 福島県内の特別支援学校の被災状況
- 児童生徒・教師・保護者が必要としている支援
- 福島県の特別支援学校や特別支援教育の復興に向けての課題
- 特別支援学校に在籍する児童生徒の心のケアについてのニーズ

2 調査の手順

(1) 調査対象:

福島県内の全特別支援学校(分校を含む)
23校

(2) 調査方法:

- 1) 質問紙による調査・郵送調査(全23校)
- 2) 聴き取り・訪問調査(2校)

(3) 調査期間:

平成23年6月8日~7月25日

3 特別支援学校に在籍する児童生徒の支援に関する調査結果(調査1)

(1) 他校へ避難した児童生徒: 193名

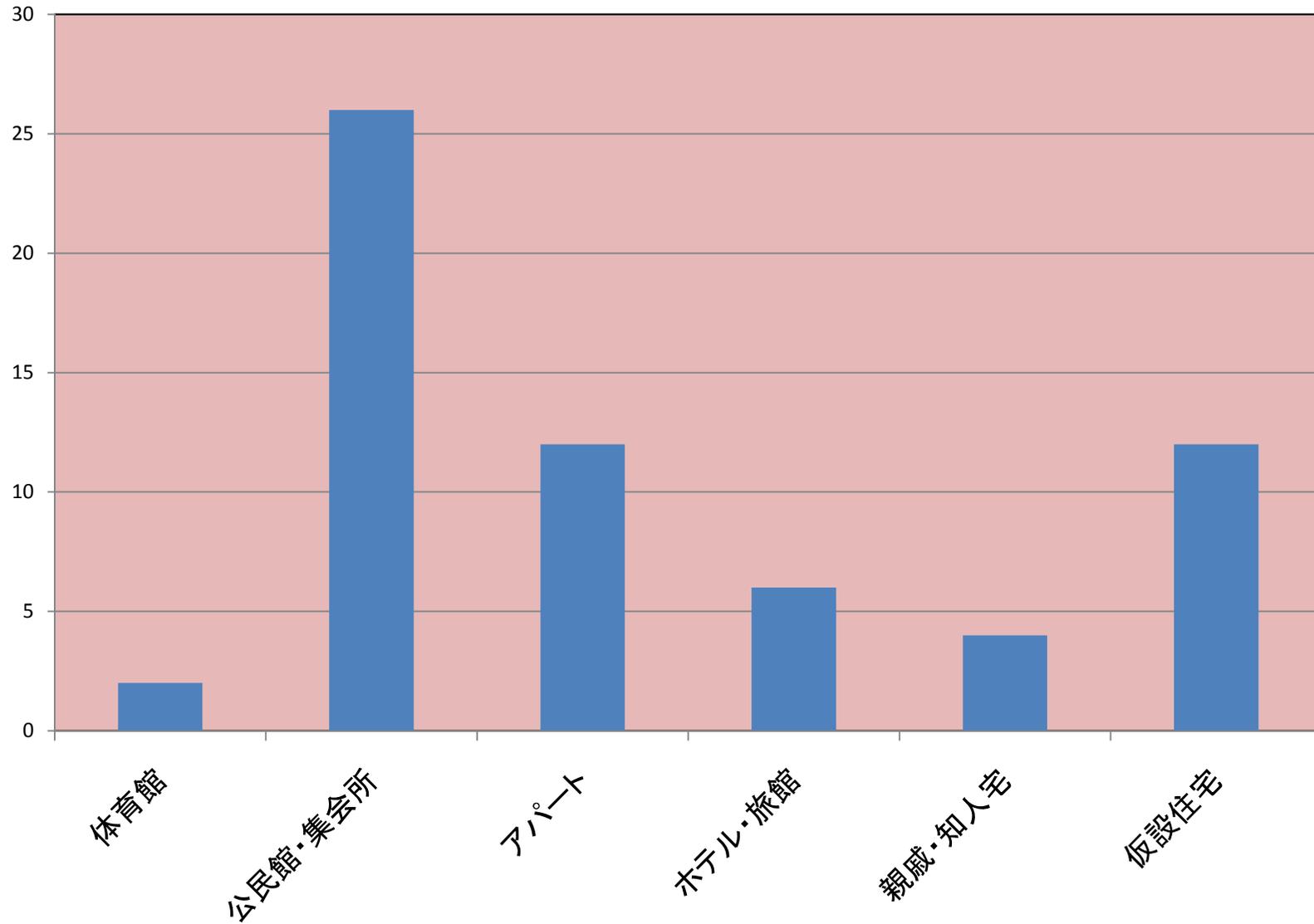
* 富岡養護学校: 59名 → 千葉県などの県外へ
60名 → 県内の8校へ避難

* あぶくま養護学校安積分校: 31名 → 聾学校へ

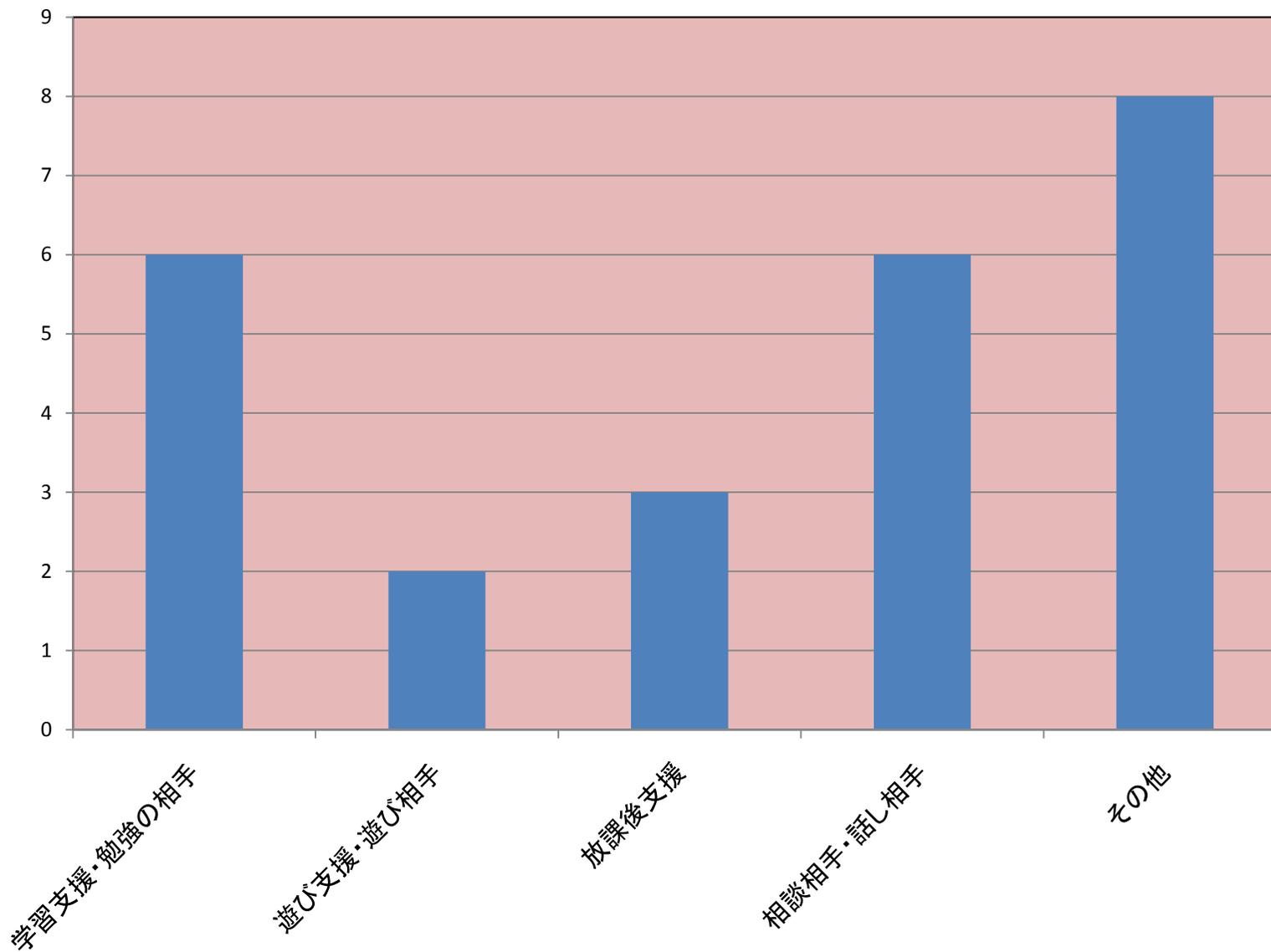
(2) 県内の特別支援学校に避難して来た児童生徒: 62名 + 31名(安積分校) = 93名

(3) 県内の特別支援学校に避難して来た教職員: 64名 + 29名(安積分校) = 93名

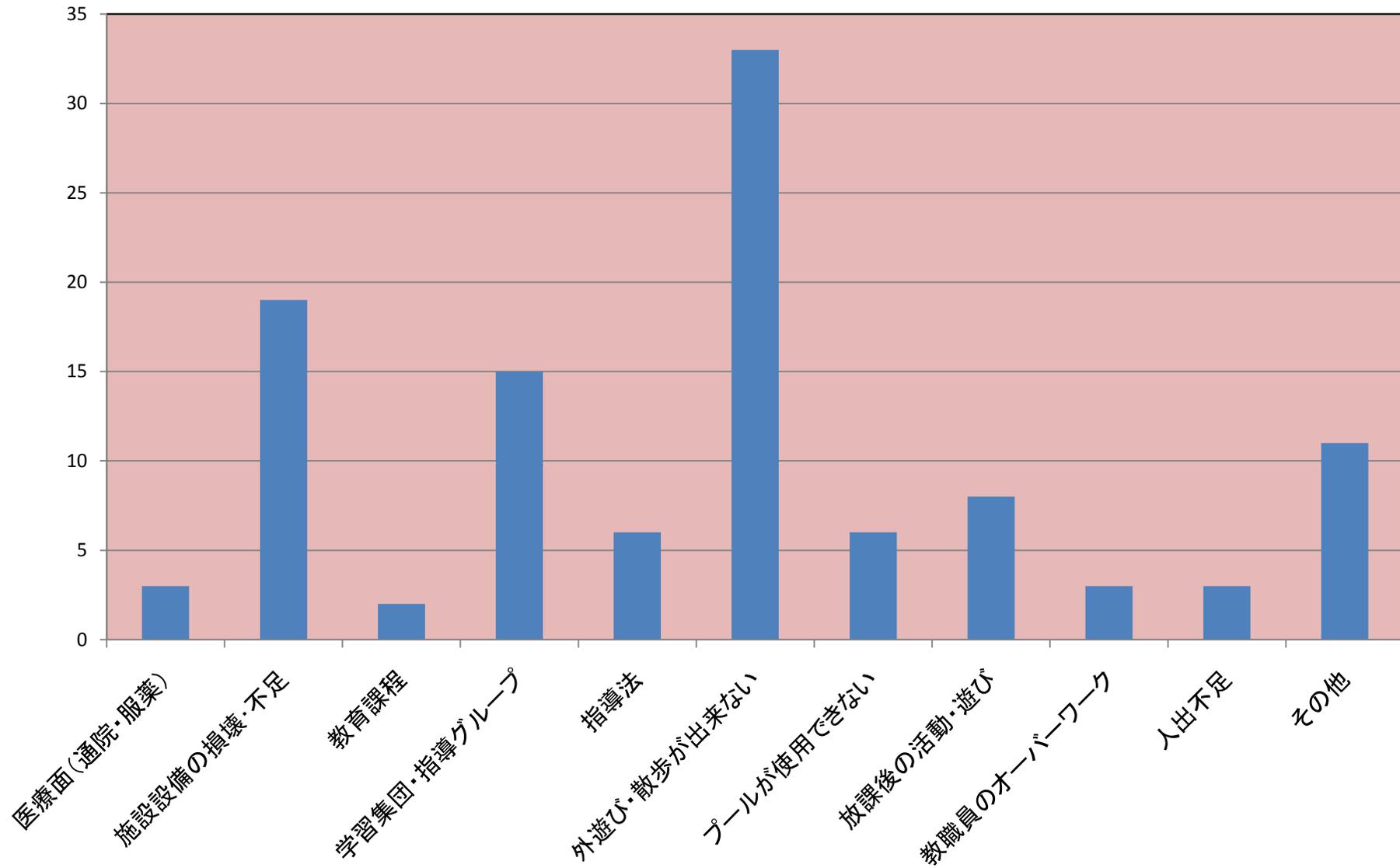
(4) 児童生徒の避難先



(5) 避難先で必要とする支援



(6) 現在、一番困っていること



(7) 学校として欲しい情報

- (1) 放射線に関する情報
- (2) 被曝の人体に与える影響
- (3) 放射線や放射性物質への対応法や除染
- (4) 原発事故の収束の見通し
- (5) 学校の再建・復興へ向けた見通し
- (6) 校外学習や活動のできる施設・内容等
- (7) 不登校等で学校に通学していない子どもの実態等

4 震災復興に向けた福島県の特別支援学校のニーズ調査(調査2)

(1) 震災前と震災後の子どもや学校の変化や動き

1) 子どもの変化や動き

- * 眠れないと訴える、ストレスを感じている
- * 余震や地震速報へ敏感・過剰反応
- * 通学方法の変更、外遊びが出来ない

2) 教師の変化や動き

- * 見通しが立たず、不安、情報収集
- * 危機管理意識が強まった
- * 児童生徒のストレス軽減・安全確保

3) 保護者の変化や動き

- * 放射能レベル・影響等へ質問の増加
- * 避難生活を余儀なくされた
- * 緊急時の通信・連絡体制の問い合わせ

4) 学校の変化や動き

- * 屋外活動やプールの使用禁止
- * 学校行事や教育課程の見直し
- * 緊急対応のマニュアルの整備・避難訓練
- * 校舎、施設・設備の破損(使用出来ない)

(2) 被災地の児童生徒を受け入れるために必要な態勢

1) 施設・設備(教室・教材教具)

- * 机・ロッカーなどの不足

- * 温度、湿度、暑さ対策、水道水の安全

2) クラス編制・指導体制

- * 児童生徒の増加に伴う教員不足

3) カリキュラム・指導計画

- * カリキュラムの見直し

- * 情報の共有化、指導方法の共有化

(3) 被災地の特別支援学校の復興に何が一番必要か

安全・安心な環境、学習環境の確保
放射能・地震・津波等に対する安全対策
正しい、迅速な情報
教職員へのケア、マンパワー
保護者の安定、就労・収入

(4) 大災害時の各学校・教委・大学等の 連携・協力態勢

1) 各学校の役割と連携・協力態勢

- * 自校のことで精一杯で他校と連携が取れなかった

- * 特別支援学校間での情報の共有

- * 障害者別のネットワーク作り、関連機関との連携

2) 教委の役割と連携・協力態勢

- * 迅速な情報の提供と共有、指針の提示

- * 県教委・市教委のネットワーク作り、情報の共有

- * タイムリーな情報の提供

3) 大学の役割と連携・協力態勢

- * 放射能、災害に関する情報の発信

- * ボランティアの派遣

- * カウンセリング、建物の強度、講演・助言など専門分野からの支援

(5) 福島県の特別支援教育の復興・充実に 向けての課題

富岡養護学校を中心とした学校の再建・復興

学校や教員・施設の再配置

放射能から子どもを守る環境

今後のビジョン作り

教員の研修の充実、不安低減

施設・設備の復興

県外避難の児童生徒への思い

5 特別支援学校在籍児童生徒の心のケアに関するニーズ調査(調査3)

(1) 調査対象幼児児童生徒(全23校)

1) 幼稚部: 8名

2) 小学部: 703名

3) 中学部: 473名

4) 高等部: 923名

計: 2,107名

(2) 反復的・侵入的、苦痛な想起、フラッシュバック

- また怖い体験をするのではないかと怖がり、不安がる (小: 6.7%、中: 6.8%、高: 3.3%)
- 自分が体験した怖かったことを、繰り返し話す (小: 4.0% > 中: 3.4% > 高: 1.7%)
- 「突然怖かった体験を思い出し、怖がったり泣いたりする」などの生々しい恐怖体験のフラッシュバック (小: 1.4% > 中: 1.1% > 高: 0.8%)

年少の児童生徒ほどフラッシュバックを体験していた

(3) 回避、活動や関心の減退、感覚や感情の麻痺

- 地震や原発に関連したニュースを怖がり、その話題を避けたがる(小:0.9%、中:1.7%、高:0.5%)
- 震災前と比べ、元気がなく、無口で引きこもりがちになった(小:0.1% < 中:0.4% < 高:1.0%)

感情麻痺ないしは抑うつ反応を示唆する行動が1%弱見られ、この行動は年長になるにつれて多くなっている

(4) 過覚醒や不眠、集中困難、過度の警戒心、驚愕反応、情動不安、退行、頭痛・食欲不振・下痢などの身体化症状

- 感情が不安定で、急に泣いたり、怒ったりする情動不安(小:2.7%、中:0.8%、高:1.1%)
- 今まで以上に、多動で落ち着かなくなった(過覚醒)(小:1.4% > 中:0.2% > 高:0.0%)
- 不眠、悪夢を見る、寝ぼけて歩き回る、夜中に目を覚まし怖がる(トラウマ体験に伴う過覚醒)(小:1.7% > 中:0.6% > 高:0.4%)
- 赤ちゃん返りをした印象がある(小:2.3%)

(5) もともとあった障害特性の増悪

- パニックやこだわりが多くなった (小:1.3% > 中:0.2% > 高:0.0%)
- 奇声や独り言が多くなった (小:0.9% > 中:0.4% > 高:0.1%)
- 自傷行為や徘徊 (小:0.4%、中:0.0% 高:0.0%)

6 聴き取り・訪問調査

(1) 富岡養護学校

- ・避難所生活を転々として落ち着かない
- ・保護者の気遣い、気兼ね、気疲れやストレス
- ・避難所では遊び空間の確保や話し相手が必要
- ・親や教師との分離不安、不眠、フラッシュバック
- ・教師のオーバーワーク、教師への支援が必要
- ・保護者の不安の解消と、就労・雇用の確保
- ・緊急時なのに事務的・形式的処理に追われた
- ・近隣の学校や空き教室の活用

(2) あぶくま養護学校安積分校

- ・児童生徒及び教職員が丸ごと避難
- ・学校行事等の教育計画の大幅な見直し
- ・教室を仕切ったの教育活動
- ・聴覚障害児との交流
- ・保護者の理解と負担

< 両校とも >

学校としての存在感のアピール(校名掲示)

校旗・校歌の有り難さ

7 まとめ(結論)

- 6月末時点で福島県内の特別支援学校に在籍する幼児児童生徒の約10%が県内外に避難していた。
- 避難先で必要とされている支援は「学習支援・勉強の相手」「遊び相手」「心のケア」であった。
- 学校で困っていることは、「外遊び・散歩ができない」「施設・設備が足りない」ことなどが多く挙げられた。
- 今必要な情報は、「放射線に関する正確な情報」「被曝が人体に与える影響」「放射能への対応や除染」が多く挙げられた。
- 心のケアについては、反復的で苦痛な想起、フラッシュバックや、活動や関心の減退、感覚や感情の麻痺、過覚醒や不眠、集中困難、過度の警戒、情動不安、退行、頭痛・食欲不振・下痢などの身体化症状など、PTSDを示唆する症状が一定程度の児童生徒に見られ、心のケアの必要性が指摘された。
- 震災前後の子どもの変化、他校からの児童生徒の受け入れ、学校間・教委や大学との連携、復興に向けた取り組みなど、多岐にわたる回答や提案が寄せられた。

喫緊に必要なとされる支援や課題

- 特別支援学校の児童生徒に対する心のケアの必要性(小 > 中 > 高)
- 子どもを支援する教師自身へのケアの必要性(メンタルヘルス・ストレスケアの講習)
- 保護者が抱える課題への相談支援
- 保護者に対する心のケアや生活支援
- 学校の施設・設備の復旧と安全確保
- 学校間、教委、関係機関との連携や全国的なネットワークづくり